

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 日本独文学会 ドイツ語教育部会

(代表者 草本 晶 会員数 約470人)

T E L 03-5950-1147

1 前 文

現行の学習指導要領は令和4年度から年次進行で実施されており、令和7年度共通テストは、新課程の下で学んだ高校生が受験する節目の年となった。本評価書では、共通テストの『ドイツ語』の問題が、学習指導要領の目標に沿う形で作成されているかどうか、また、大学教育を受けるにふさわしい能力を判断する設問になっているかを総合的に評価した結果を報告する。

令和7年度共通テスト(本試験)におけるドイツ語受験者は96人であった。前年度(令和6年度)では受験者数が101人であった。令和5年度は82人であり、その時よりは多いものの、再び受験者が100人を割った。共通テストのドイツ語受験者数は、近年100人前後で推移している。全体的には減少傾向が続いており、この点はドイツ語関係者全体で深刻な事態として受け止めねばならない。

平均点は127.24点であった。最高点は200点、最低点は41点であった。令和6年度の平均点は130.95点であり、今年度の平均点はやや下がっている。これは、今年度の問題形式変更による影響と推測される。標準偏差は47.14である。これは得点分布の山が80.10点~174.38点の間に集まっていることを示し、この得点分布は想定しうるものであると言える。

問題形式は、共通テスト初年度の令和3年度に大きく変わり、それ以降は形式の大きな変更はなかったが、今年度は大問が7問から6問に減り、発音の知識を問う問題がなくなるなど、再び大きな変更があった。学習指導要領で目標とされている、実際のコミュニケーションで必要とされる知識やスキルがより一層問われるような工夫がなされていると評価できる。ただし、今回の変更については様々な意見があった(このことについては後述する)。

2 試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価

昨年度は大問1~7という構成だったが、今年度は大問1~6という構成になった。文法知識を問う問題が昨年度に比べ、今年度は縮小された。長文問題の数は昨年度と同様、大問が4問である。文法知識を問う問題は、大問1と大問2で51点であり、長文問題に対する配点(大問3~6, 149点)の割合が高くなった。

出題形式に関しては、発音・アクセントを問う問題は出題されなかった。コミュニケーションの基礎となる文法知識を問う問題として、大問1と大問2が割り当てられていたが、語句整序を問う大問2のみが昨年度と同様の出題形式を取っているものの、大問1では問合せメールの中で単語の空欄補充と語尾変化を問う問題が出題された。現在英語では、発音、アクセント、語句整序などを単独で問う問題は作成しておらず、ドイツ語もそれに倣ったと考えることができるだろう。それに比べれば、長文問題の出題形式には大きな変更は見られなかった。長文問題のテーマは、概して高校生に身近に感じられる事柄が選択されていた従来のテーマに比べ、今年度は社会的・学術的なテーマも含まれているため、内容はやや難化した。身近な話題だけではなく、一般的な教養や社会問題を問われる点は、大学での学業の準備と捉えられる。テキストの種類としては、家族との会話、質疑応答と要約、図表資料と記事、論説文が出題された。これは学習指導要領の目標を見据えて時代に即した工夫がなされた結果と思料される。

ドイツ語総語数（のべ語数）は2,364、総語彙数（単一語の初出回数）は730であった。昨年度の総語数（2,231）、総語彙数（608）に比べ、どちらも100語以上増加した。総語数の伸びについては、昨年度の大問7では問題文が1頁に収まる分量であったが、今年度は対応する大問6が2頁になったことが大きな要因である。また、総語彙数の増加に関しては、テーマの幅の広がりが総語彙数増加に影響を与えていると思われる。

本評価で使用している過去の出題語彙データベースに蓄積している語、一般的独和辞典（見出し語6～8万語程度）で基礎語彙として扱われている語、基礎語彙を組み合わせた合成語、固有名詞、国際語、注付きの語、派生語のうち形態素の意味からその意味が容易に想像できる語などを除くと、やや難度が高いと思われる語の数は25語であった（★）。

★ Anhang, Anteil, Aprilscherz, basieren, beeinflussen, Diskriminierung, EG-Öko-Verordnung, einstufen, einteilen, erwähnen, Gewinnspiel, Grundlage, Heilstätte, interpretieren, jeweilig, lauten, Nährstoff, Nährwert, prägen, spenden, Sünde, transparent, verschütten, weiterhin, widerspiegeln

上記25語を難語に挙げたものの、これらの語は一般的な独和辞典において見出し語として挙げられている語彙である。Gewinnspiel「懸賞金」のみ見出し語ではないが、その語の意味は内容から容易に推察できる。今年度は難語の数も昨年度（13語）に比べて増えたが、総語彙数が大幅に増加しているにもかかわらず、むしろ難語は25語程度に抑えられている。全体的には基本的語彙を活用し、そもそも難度が高い語にはあらかじめ注やイラストを施すことで結果的に難語使用が回避され、受験者の負担に配慮したことが伺える。

上述の難語のうち、大問1と大問2に出現する難語は1語ずつであり、大問3では3語、大問4では4語、大問5では7語、大問6では9語である。ほとんどの語は1回のみ使用され、解答に際して大きな影響を与えるものではない。また、basieren, beeinflussen, Diskriminierung, interpretieren, transparentなどの単語は、英語を手掛かりに意味を推測できる。Nährstoff, Nährwertは大問4や大問5のテーマに関わる重要語であるが、基本語彙のErnährungと共通する部分があることに気付くことができれば、それぞれの意味を類推できる可能性はある。

以下、大問ごとの評価を記す。

第1問 昨年度と比べて大きく出題傾向が変わった。これまで第1問では発音、文法、語彙の分類が出題されていたが、今年度は発音や語彙に関する出題がなくなり、昨年度の第2問に似た、基本的な文法や語彙の知識を問うパートとなった。ただし、昨年度の第2問は設問ごとに独立した文章が出題されていたが、今年度の第1問ではテキスト中に[1]～[7]、及び下線を引いた単語（ア）～（エ）が埋め込まれている。また、昨年度の第2問が設問数（8）、頁数（2）、配点（24）であるのに対し、今年度の第1問は設問数（2）、解答数（11）、頁数（2）、配点（33）と、大幅に配点が増えている。このような変更が行われたのは、前文で述べたように英語の出題方法に倣ったためと考えられる。

テキストは、インターンシップを希望する大学生が企業に宛てて送った一通のメールである。インターンシップという制度や、企業に宛てて自己アピールのメールを送るというドイツの習慣は、高校生にはなじみがないかもしれない。しかしながら、メールの内容は自己紹介やドイツ語学習歴の説明であることから、身近で取り組みやすく、難度も適切である。また、昨年度のような独立した文章に比べ、テキストは前後の文脈から文意を推測しやすいことから、文法知識に裏付けられた総合的な力を問うていると考えられる。

問1 9つの語群から、テキスト中の[1]～[7]に当てはまる語を選ぶ。語群には、前置詞、人称代名詞、再帰代名詞など、多様な語が含まれている。

[1]は、bewerbenと結びつく④michを選ぶ。知っておいてほしい知識であり、出題の狙い

も明確である。[2]は、habe の分離前つづり②vor を選ぶ。後ろに zu 不定詞句が続くことに気が付けば、難しくはないだろう。[3]は、前置詞⑦während を選ぶ。meines Studiums が 2 格であること、Studium と über Web-Design lernen が対比されていることに気が付くか否かが鍵となるが、教科書によっては 2 格支配の前置詞が扱われないこともあるため、難度はやや高い。[4]は、直前の eine B2-Prüfung から、比較的容易に⑤bestanden を選ぶことができる。[5]は、⑨mir を選ぶ。後続の mitteilen の意味を知っていれば難しくない。[6]は、schicken が 3 格目的語を必要とすることを理解していれば、正答を選ぶことができる。基本的な知識を問う問題である。[7]は、⑥freuen を選ぶ。前置詞 über や再帰代名詞 mich に気が付くことができれば、正答を導き出せるだろう。

問2 テキスト中の下線を引いた単語 (ア) ~ (エ) の語尾として適切なものを選ぶ。このうち 3 問は前置詞の格支配に関する基礎的な知識を問う問題であり、残る 1 問は形容詞の付加語的用法の語尾変化を問う問題である。

[8]は、直前の前置詞 mit が 3 格支配であること、直後の Bachelorstudium が中性名詞であることに着目し、所有冠詞 mein の語尾として④-em を選ぶ。[9]は、直前の前置詞 seit が 3 格支配であること、直後の Schulzeit が女性名詞であることに着目し、所有冠詞 mein の語尾として②-er を選ぶ。[10]は、直前の前置詞 für が 4 格支配であること、直後の Bewerbung が女性名詞であることに着目し、不定冠詞 ein の語尾として①-e を選ぶ。[11]は、不定冠詞付きの形容詞の語尾として⑤-en を選ぶ。形容詞の語尾変化が理解できていれば難しくはないが、間違いやすい部分でもあり、難度はやや高い。

第2問 設問数 (3)、解答数 (6)、頁数 (2)、配点 (18) であり、出題形式は昨年度の第3問と同様で、6つの選択肢から5つを選んで空所を補い、文を完成させる。全体として適切な難度であり、文の内容は現代における社会的な話題を取り扱っている点が興味深い。学習指導要領に基づき、目的や場面に応じて学習者が適切にコミュニケーション能力を活用することができるかを測ろうとしている問題であると評価する。

問1 「私は確信している」のドイツ語表現が ich bin sicher であると理解しているかが問われている。また、接続詞 auch wenn の意味と、それに続く語順の理解も問われている。基本的な表現の知識を問う問題である。

問2 「～をお願いします」を表現するためには um etw. bitten, その後に続く「マスクの着用」には zu 不定詞を用いることに気付けるか、及び、従属接続詞 solange を使用する表現の語順への理解を問うている。コロナ禍で学習者が頻繁に触れたであろう表現を取り上げた点は興味深く、良問である。

問3 trotz が「にもかかわらず」を意味し、2 格支配の前置詞であることに気付いた上で、適切に文を組み立てることができるかを問うている。「急激に減少している」の表現として drastisch zurück を用いることができると理解できているかもポイントとなる。難度はやや高い。

第3問 連続性のある会話の解釈を問う形式である。頁数 (7)、設問数 (7)、解答数 (8) 及び、配点 (40) である。また、会話文に対してテキストが付随したイラストが 2 つ使用されている。題材は、あるドイツ人 4 人家族が 500 万ユーロに当選し、その使い道を話し合うというものである。日常的になじみのあるテーマが採用されている。

問1 会話でよく使用される Warum nicht? の表現を知っていれば正答が導き出せる問いである。たとえその知識がなかったとしても、文脈を理解できれば正答が導き出せる。

問2 この問いでも会話でよく使用される表現の理解が問われている。会話の流れを把握しつ

つ、会話文及び選択肢のドイツ語の表現を理解する必要がある。前後の文脈を理解すれば正答が導き出せる。また、問1と問2には連続性が見られるため、例えば、イラスト内のテキスト若しくは会話内の別の箇所から出題してもよかつたのではない。

問3 会話文全体を把握しながら、誰が何を望んでいるかを解答する問いである。選択肢に提示されている Freizeit を除けば、選択肢のドイツ語はそれぞれが望むものとして会話文においても発言されているため、それほど難しい問いではない。

問4 問2同様、「下線部の発言で意図されている内容」に当てはまるものをドイツ語で示された選択肢から選ぶ問いである。nicht in Frage kommen という表現を知っていることが求められる。知らない場合でも前後の文脈を踏まえれば正答を導き出すことができる。

問5 選択肢全てに提案1が含まれていること、また、イラスト内に示されている KI-App による1, 3, 5, 7の提案に関するドイツ語の一部が、会話文においても同様のドイツ語で言及されていることに気が付くことができれば正答できる問いとなっている。

問6 最終的な賞金の使い道に関する問いである。会話文を丁寧に読めば正答できる。母親の望む Urlaub や父親の望む Freizeit は物として購入対象にはならないため、②は例えば「最初に提案した希望を、それぞれがかなえることにした」という表現でもよかつたかもしれない。また、この問いは問7の本文の内容と合致するものを選択する問題形式とも重なると言えるため、別の形式を使用した問いを立ててもよかつたかもしれない。

問7 会話全体の内容に合うものを2つ選択する問いである。会話を適切かつ丁寧に理解することができれば正答が導き出せる。2つの正答の選択肢はそれぞれ1つ目と2つ目の会話文の内容が反映されておりバランスもよく、良問である。

第4問 設問数(5)、解答数(8)、頁数(4)、配点(30)、及び、連続性のある会話とその内容をまとめたメモを解釈した上で、ドイツ語で表現する知識・技能が試される出題形式である。今年度の会話場面では、水に関する話を行った医学博士とモデレーターが繰り広げる質疑応答が展開された。また、設問が組み込まれているメモはフォーラムに参加した学習者自身が取っているという状況設定であり、学習者が主体的な立場から問題を解く出題形式となっている点は興味深い。登場人物の会話内容として、医学・薬学的な観点から説明される水の役割や古代及びドイツの歴史上における水の使用方法が扱われ、難度はやや高いといえる。

問1 会話の表現とメモの内容に記載された語彙を理解できているかが問われている。会話の Energieverbrauch がメモでは verbrauchen、会話の vor jeder Mahlzeit がメモでは vor dem Essen、会話の wurde schriftlich erwähnt がメモでは wurde geschrieben と言い換えられていることに気付く必要がある。仮に会話で使用された語彙の意味が分からなくともメモで用いられている語彙は出現頻度が高く、会話文の意味を推測しながら、正答を導くことができる。

問2 医学博士による Körperflüssigkeiten の説明を理解できているかを問う問題である。Körperflüssigkeit は Wasser から成り立っている (bestehen aus Wasser) と読み取った上で、Wasser は重要な Lebensmittel であり、Lebensmittel に Nährstoffe が含まれていると説明されているがゆえに Die Körperflüssigkeiten enthalten Nährstoffe が正答であるというロジックに気付く必要がある。解答者の思考力を問う良く練られた問題である。

問3 会話内の das Trinken von Wasser kann Krankheiten heilen がメモの Wasser zu trinken と関連していることに気付けるか、Heilverfahren の意味を理解しているかがポイントとなる。問題の選択肢には Heilstätte が挙げられているが、その意味が分からなくとも、会話の文脈をつかむことができれば、正答の Heilmethode を選択することができる。

問4 会話の後半部分を解釈する問題である。問題文には、Römer は Kaltwasserkuren verwendet, Araber は kaltes Wasser benutzten, Deutschland では Apotheker entdeckten Mineralquellen と記述されていることに気付き、文に記述されていない内容を含む選択肢を消去すれば正答を導き出せる。文と選択肢を丁寧に読み解けるかを問う良問である。

問5 一連の会話を適切に理解し、会話内に書かれていない内容が含まれている選択肢を消去すれば、正答が①と④であることが比較的容易に導き出せる。

第5問 設問数(6)、頁数(4)、配点(35)。テキストは、ドイツ人の購買・消費に対する意識について述べた文章で、統計資料が付されている。このような出題からは、消費においても環境保護を重視するドイツ人の考え方や社会制度などを理解してほしいという出題者の意図が読み取れる。文章中で取り上げられる動物の福祉という観点はなじみがないかもしれないが、注が付いている上に文章中でも説明があり、概して予備知識がなくても理解できる内容である。文章は224語と短めで、内容に沿って4つの段落に分けられたシンプルな構成である。一方資料では、ドイツ人が商品を購入する際に重視する上位7つの項目と、そのパーセンテージが示されている。なお、イラストが1点あり、資料とともに状況理解を助けている。

問1 第一段落の要約として、適切なものを選ぶ。文章中にある Umwelt, Klima などが正答の選択肢にも使われており、難しくはない。文章全体の中心テーマでもあり、出題の意図は明確である。

問2 下線部③mehr Transparenz beim Einkauf の理解を問う問題である。下線部の直後で言い換えられているので、この内容に沿った選択肢を選ぶ。正答以外の選択肢で迷う余地は少なく、比較的容易である。

問3 資料の内容としてふさわしいものを選ぶ。数や割合に関する表現の理解が必要となるが、丁寧に読めば迷うことなく正答を選ぶことができる。

問4 ドイツの食糧政策の狙いとして適当なものを、日本語の選択肢から選ぶ。選択肢はどれももっともらしく、第二段落の内容を十分に理解しているかが問われる。

問5 5つの食品表示ラベルから、文章中で言及されているものを2つ選ぶ。設問中に「本文の第三段落で話題になっている」とあり、読むべき場所が指示されている。Tierwohl に該当する⑤と Lebensmittelampel に該当する③が正答だが、前者は文章中で具体的に描写されておらず、選択肢の図柄から読み取る必要がある。一方、後者は文章中の描写を正確に理解できていれば、正答にたどりつけるだろう。学習者は見慣れない食品表示を読み解く必要があるためやや難度が高いが、①, ②, ④が文章中にないことに気付くことができれば解ける問題である。

問6 文章のタイトルとして適切なものを選ばせる問題である。全体的な理解が必要となる、良問である。

第6問 設問数(6)、解答数(8)、頁数(5;うち、本文テキスト2頁)、配点(44)である。ドイツ語テキストの分量が従来に比べて多いことから、解答にかかる時間も増えたものと思料される。語注やイラストが効果的に配置されており、テキストは読みやすい。なお、25頁上から3行目に kulturell geprägt (文化的に特徴づけられた) とあるが、これよりも前のテキストに文化的な色の受容の話は出てこないため、違和感がある。このほか、各問についてコメントする。

問1 ①の正誤判断のためにはテキスト全体を読んでおく必要があり、最初にテキストの大意を把握させる狙いのある良問である。正答も選びやすく、難度も適切である。

問2 難度も適切であり、標準的な問いであると言える。

問3 第四段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。内容理解を問うのに適切な問いであると評価できる。

問4 第五段落の内容に合致する選択肢を選ぶ問題である。問いの狙いも明確で、難度も適切である。

問5 テキスト全体の理解度を問う意味で良問である。

問6 テキストの大意の理解度を測るために文章内容に合うタイトルを選ばせるという狙いが明確であり、良問であると言える。ただし、最後にタイトルを選ばせるのであれば、リード文のところに「色の受け止め方の違いについて述べた」と書く必要はなかった。このテキストは「色の受容の歴史」が主題であって（正答である㊸でも「黒と白の歴史」が主題とされている）、「受け止め方の違い」について述べられているのはテキスト後半にすぎない。リード文は、単に「次の文章を読んで、後の問い（問1～6）に答えよ」とすべきである。

3 総評・まとめ

今年度の共通テスト『ドイツ語』は、出題形式や配点が大きく変化した。長文問題では、高校生や大学生に身近な題材よりも、ドイツ語圏の生活にも興味を持つことが求められているような題材を基にした文章が多く出題された。出題内容も、分量の多いドイツ語文を読むことが求められると同時に、前半部分（大問1～3）ではコミュニケーションが重視され、後半部分（大問4～6）では質疑応答の論点整理や図表の分析など、思考力や判断力を問う内容も含む、様々な問題が出題された。これは、学習指導要領の「外国語」でうたわわれている学習目標を試験内容に反映させた結果であると評価できる。

その一方で、今回の変更については本評価委員の中でも様々な意見があった。出題方法が英語に類似していることは本評価書の2「試験問題の程度・設問数・配点・形式等への評価」で述べたとおりである。しかし、リスニングが行われないドイツ語の問題で発音やアクセントに関する問題が削除されても良いのか、また、多くのドイツ語学習者がドイツ語を学び始めるのは英語よりも後であり、英語も学びながらドイツ語を学習している場合、ドイツ語の出題も英語に準じる必要があるのかという疑問もある。さらに、読む分量が増加したことで、問題形式が類似し、選択肢が平易になることでむしろ問題が簡単になってしまったのではないかという懸念もある。本委員会としては、出題者の今回の変更は尊重しつつも、今後も高等学校でのドイツ語学習の成果を効果的に測り、大学教育への入り口として適切な試験問題を求める。

英語に偏りすぎない外国語教育が展開されるためにも、共通テストにおける『ドイツ語』など諸外国語の果たす役割は大きいと思われる。今後とも共通テスト『ドイツ語』の存続を切に願うものである。